

生成音韻論から見た辞のアクセント

奥田邦男

1. はじめに

日本語のアクセントに関する研究は、アクセント辞典の編さん、アクセントの音韻論的解釈、語アクセント・文アクセントの記述的研究、方言アクセントに関する研究、実験音声学的研究、アクセント体系の歴史的変遷に関する研究など、その領域は多岐にわたり、明治以来現在までに発表された文献は、単行本・論文を合わせて2,000点を越えるほどであるといわれる。⁽¹⁾ところが、そのほとんどは自立語のアクセントや文アクセントの研究であり、付属語や接辞のアクセントの研究は未開拓のまま残された領域であるといわざるをえない。近年になってようやく辞のアクセントに関する論文も見られるようになったが、⁽²⁾これまでおろそかにされてきた理由としては次のような点を挙げることができよう。

- (1) (i) 助詞・助動詞、接辞・造語成分などの付属語は、現象面では単独に現われることはなく、常に自立語に付いて1つのアクセント単位を形成するため、個々の付属語だけを切り離して分析の対象にしにくいこと。
- (ii) 付属語は、それ自体の持つ付属性のゆえに自立語ほどはっ

きりと自らのアクセントを主張することがない。従って、有核(起伏型)・無核(平板型)の自立語に接続する場合、種々変化したアクセント相を示し、一定した固有のアクセントの型を抽象しにくいこと。

- (iii) 従来のアクセントの記述は自立語を中心に行われる場合がほとんどであり、自立語に付属語が付いた場合の分析がなされても、接続する付属語はせいぜい1つ止まりであって付属語が重なって付く形はほとんど考慮されることがなかったこと。
- (iv) 付属語の形式は、自立語に比べて方言間の相違が大きく、アクセント辞典やアクセント付きの国語辞典等に採録されにくいこと。
- (v) 国文法の伝統に従って、動詞・形容詞に助詞・助動詞などの付いた形のアクセントは、全体が動詞・形容詞の「活用形のアクセント」としてとらえられ、「動詞・形容詞の語幹+付属語(群)」のように構造的に分析することが一般にはあまり行われないこと。
- (vi) 付属語のアクセント表記法が、自立語の場合のように確立していないこと。

本稿では、生成音韻論 (Generative Phonology) の立場から日本語の辞のアクセントの解釈を試み、それが従来の構造言語学の音韻論的 (音素論的) 解釈とどう違うかということについて論じてみたい。

2. アクセントの音声表示とその音韻論的解釈

アクセントの表示には、一般に、ピッチの高低を現象面に即して具体的にとらえる「音声表示」(Phonetic Representation) のレベルと、余剰の要素を除き弁別的要素だけを抽出した「音韻表示」(Phonemic Representation) のレベルがあると考えられている。

音声表示のレベルでは、発話におけるピッチの高い部分の上 (縦書きでは右横) に実線を引き、ピッチの低い部分には実線を引かないで区別するわけである。(必要に応じて、中程度のピッチの高さの部分の上に破線を引いていわゆる「準アクセント」を示すこともある。) 表1に示したような音声表示は、実線の有無によって声の高低を具体的に表わしているが、これは実際の物理的ピッチ曲線をそのまま再生したものではなく、いわゆるピッチの自然下降などを捨象した、やや抽象化された表示といえることができる。また、いわゆる平板型に属する語 (「柄」「ウシ」「ウサギ」「ニワトリ」) と尾高型に属する語 (「絵」「イヌ」「カガミ」「ノコギリ」) は、単独ではピッ

表 1 アクセントの音声表示

1 モーラ語	柄	柄ガ	柄カラ	柄マデ	コノ柄ハ	柄デス
	絵	絵ガ	絵カラ	絵マデ	コノ絵ハ	絵デス
2 モーラ語	ウシ (牛)	ウシガ	ウシカラ	ウシマデ	コノウシハ	ウシデス
	イヌ (犬)	イヌガ	イヌカラ	イヌマデ	コノイヌハ	イヌデス
	サル (猿)	サルガ	サルカラ	サルマデ	コノサルハ	サルデス
3 モーラ語	ウサギ (兎)	ウサギガ	ウサギカラ	ウサギマデ	コノウサギハ	ウサギデス
	カガミ (鏡)	カガミガ	カガミカラ	カガミマデ	コノカガミハ	カガミデス
	ココロ (心)	ココロガ	ココロカラ	ココロマデ	コノココロハ	ココロデス
	カブト (兜)	カブトガ	カブトカラ	カブトマデ	コノカブトハ	カブトデス
4 モーラ語	ニワトリ (鶏)	ニワトリガ	ニワトリカラ	ニワトリマデ	コノニワトリハ	ニワトリデス
	ノコギリ (鋸)	ノコギリガ	ノコギリカラ	ノコギリマデ	コノノコギリハ	ノコギリデス
	アオゾラ (青空)	アオゾラガ	アオゾラカラ	アオゾラマデ	コノアオゾラハ	アオゾラデス
	ウグイス (鶯)	ウグイスガ	ウグイスカラ	ウグイスマデ	コノウグイスハ	ウグイスデス
	コーモリ (蝙蝠)	コーモリガ	コーモリカラ	コーモリマデ	コノコーモリハ	コーモリデス

チ上の区別はなく、助詞・助動詞などが接続してはじめてその相違がはっきり現われることは周知のとおりである。⁽³⁾

一方、音韻表示のレベルでは、東京方言などの場合、(1) ピッチの下降があるかないか、(2) もしあればどこにあるか、ということを示すれば十分であると考えられ、ピッチの下降が見られる位置に弁別の特徴として、/ɿ/ (「アクセント核」) を付して表示するの

が一般的である。なお、/ɿ/の位置を数値化して、①, ②, ③, ④のように表示することも行われる。①は無核, ②はn番目のモーラにアクセント核があるという意味である。単独で起こる場合、音声表示では区別されない平板型の語と尾高型の語も、音韻表示のレベルでは、前者は無核、後者は語末にアクセント核があると解釈されて区別されるわけである。(表2参照)

表 2 アクセントの音韻表示

1 モーラ語	①	柄	柄.ガ	柄.カラ	柄.マデ	コノ 柄.ハ	柄.デス
	②	絵ɿ	絵ɿ.ガ	絵ɿ.カラ	絵ɿ.マデ	コノ 絵ɿ.ハ	絵ɿ.デス
2 モーラ語	①	ウシ	ウシ.ガ	ウシ.カラ	ウシ.マデ	コノ ウシ.ハ	ウシ.デス
	②	イヌɿ	イヌɿ.ガ	イヌɿ.カラ	イヌɿ.マデ	コノ イヌɿ.ハ	イヌɿ.デス
	③	サɿル	サɿル.ガ	サɿル.カラ	サɿル.マデ	コノ サɿル.ハ	サɿル.デス
3 モーラ語	①	ウサギ	ウサギ.ガ	ウサギ.カラ	ウサギ.マデ	コノ ウサギ.ハ	ウサギ.デス
	②	カガミɿ	カガミɿ.ガ	カガミɿ.カラ	カガミɿ.マデ	コノ カガミɿ.ハ	カガミɿ.デス
	③	ココロ	ココロ.ガ	ココロ.カラ	ココロ.マデ	コノ ココロ.ハ	ココロ.デス
	④	カɿブト	カɿブト.ガ	カɿブト.カラ	カɿブト.マデ	コノ カɿブト.ハ	カɿブト.デス
4 モーラ語	①	ニワトリ	ニワトリ.ガ	ニワトリ.カラ	ニワトリ.マデ	コノ ニワトリ.ハ	ニワトリ.デス
	②	ノコギリɿ	ノコギリɿ.ガ	ノコギリɿ.カラ	ノコギリɿ.マデ	コノ ノコギリɿ.ハ	ノコギリɿ.デス
	③	アオゾɿラ	アオゾɿラ.ガ	アオゾɿラ.カラ	アオゾɿラ.マデ	コノ アオゾɿラ.ハ	アオゾɿラ.デス
	④	ウグɿイス	ウグɿイス.ガ	ウグɿイス.カラ	ウグɿイス.マデ	コノ ウグɿイス.ハ	ウグɿイス.デス
	⑤	コɿーモリ	コɿーモリ.ガ	コɿーモリ.カラ	コɿーモリ.マデ	コノ コɿーモリ.ハ	コɿーモリ.デス

表2に掲げたアクセントの音韻論的解釈は現在一般に行われているものであるが、「ガ」「カラ」「ハ」などは有核の自立語には低く下がって付き、無核の自立語には高く平らに付くため、無核の助詞

(/ガ/ /カラ/ /ハ/) ということになる。一方、助詞「マデ」や助動詞「デス」は、有核の自立語に接続する場合は無核(すなわち、/マデ/ /デス/) であるが、無核の自立語に接続する場合には有核

(/マ7デ/ /デ7ス/) であると解釈され、音韻表示のレベルでそれぞれ/マデ/~/マ7デ/, /デス/~/デ7ス/の2通りのアクセントの型を持つことになる。このような解釈は、音声表示のレベルよりは抽象的であるが、生成音韻論でいう「基底表示」(Underlying Representation)のレベルよりは具体的な中間的なレベル(いわゆる「音素表示」のレベル)を言語学的に有意なレベルとして認めることになる。

生成音韻論の立場は、このような中間的なレベルは言語学的に有意であるとは考えず、むしろ、さらに基本的で抽象的な基底表示を有意なものとして設定し、それから音声表示を矛盾なく統一的に導くために必要な一連の音韻規則・音声規則を明らかにしようとするのである。例えば、音声表示 [ニワトリマデ], [ノコギリマデ], [ニワトリデス], [ノコギリデス] は、それぞれ、/ニワトリ.マ7デ/, /ノコギリ7.マ7デ/, /ニワトリ.デ7ス/, /ノコギリ7.デ7ス/ という基底表示を持ち、有核の自立語に接続する有核の付属語のアクセントは(2)に掲げる「先行アクセント優位の原則」(4)によって自動的に消去されると仮定することによって説明することができる。(3)は東京アクセントの音声表示を正しく導き出すに必要なピッチ顕示規則である。ノ

基底表示のレベルから音声表示のレベルに至る過程を例示すれば(4)のようになる。

(4) 基底表示	/ニワトリ.マ7デ/	/ニワトリ.デ7ス/	/ノコギリ7.マ7デ/	/ノコギリ7.デ7ス/
先行アクセント優位	—	—	ノコギリ7.マデ	ノコギリ7.デス
ピッチ顕示規則	ニワトリ.マデ	ニワトリ.デス	ノコギリ.マデ	ノコギリ.デス
音声表示	[ニワトリマデ]	[ニワトリデス]	[ノコギリマデ]	[ノコギリデス]

(2) 先行アクセント優位の原則

1つのアクセント節(小文節に相当)の中にアクセント核が2つ以上ある場合には、最初(すなわち左端)のアクセント核を残して他は消去される。

(3) ピッチ顕示規則(東京方言)

(i) 高ピッチ付加

% × % → 高₁

(ii) 低ピッチ付加

(a) 高₁ → 低₁ / [+ア核] —

(b) 高 → 低 / % — 高₁

(ただし、「%」は小文節境界要素、「高」は高ピッチモーラ、「低」は低ピッチモーラ、「高₁」は高ピッチが1モーラかそれ以上続くことをさす。)

なお、(3)のようなピッチ顕示規則は、地域差⁽⁵⁾・個人差があるが、アクセント節(小文節)中の「派生アクセント」(基底アクセントに種々のアクセント規則が適用されて派生する表層アクセント)の有無とその位置、および小文節境界要素(%)に基づいて、ピッチを担う単位(東京方言の場合モーラ)に高低のピッチを付加するものである。ノ

生成音韻論の立場からすると、「マデ」「デス」などの付属語は、語彙目録（辞書）の中に/ $\text{マ}7\text{デ}/$ / $\text{デ}7\text{ス}$ /(6)のような基底アクセント表示を持った形態素として登録されている。つまり、生成音韻論では、同一の形態素は原則として同一の形（すなわち同一の基底表示）を持つと考えられ、さきに見た表2の音素論的解釈の場合のように、同一の形態素が2通りのアクセントの型を持つと考える必要はなくなるのである。表2の音素論的解釈におけるアクセント表示は、基底アクセントではなく、派生アクセントを表示したものであることができる。

3. 付属語の基底アクセント

前節で、2モーラの付属語のうち「マ7デ」や「デ7ス」はそれぞれ固有の基底アクセントを持っていることを論じた。このような付属語は、通常、それ自体独立して用いられることはなく、「マ7デ」と言ってみてください。」や「ガ」は格助詞です。」のように、辞を単独に取り上げる場合は別として、自立語や他の付属語に接続して用いられるため、自己の固有のアクセントを持っていても、それは音声レベルではなかなか実現されにくい。すなわち、有核の自立語や有核の付属語に接続すれば、(2)の「先行アクセント優位の原則」によって後続の付属語の基底アクセントは抑えられてしまうからである。したがって、辞の固有のアクセントが具現化されるのを確かめるためには、無核の自立語に接続する場合のデータを検討するのが効果的であると考えられる。また、一般に無核の助詞として扱われている「ガ」、「ヲ」、「ニ」、「ヘ」、「ハ」、「モ」、「カラ」などが、本

当に無核であるかどうか、むしろ/ $\text{ガ}7$ 、/ $\text{ヲ}7$ 、/ $\text{ニ}7$ 、/ $\text{ヘ}7$ 、/ $\text{ハ}7$ 、/ $\text{モ}7$ 、/ $\text{カラ}7$ のように「尾高型」の基底アクセントを持っているのではないかということを確認するためには、さらに別の付属語が重なって付いた形を検討する必要があると思われる。なぜなら、無核の自立語にこのような助詞が1つだけ接続した形では、文節全体が/ $\text{ニ}7\text{トリ}7.\text{カラ}7$ のように尾高型になり、文節末のアクセント核がピッチの下がり目として実現されないからである。[$\text{ニ}7\text{トリ}7.\text{カラ}7$], [$\text{ニ}7\text{トリ}7.\text{モ}7\text{デ}7\text{ス}$]のように付属語が重なって付いた形を検討することによって、/ $\text{ニ}7\text{トリ}7.\text{カラ}7.\text{ハ}7$ / $\text{ニ}7\text{トリ}7.\text{モ}7.\text{デ}7\text{ス}$ /のような基底表示が妥当であることが明らかになるのである。

このように、辞の固有のアクセントを浮き彫りにするには、第一に、無核の自立語に付属語が重なって接続している形、すなわち、前後に並ぶ横の (syntagmatic) 関係に注目するのがよい。しかし、同時に、無核の自立語を有核の自立語に置き換えて、相互に比較するなど、縦の (paradigmatic) 関係に見られる変化にも注目すべきことは言うまでもない。以下、このような方法に従って、辞の基底アクセントの類型を明らかにしてみたい。

3.1 名詞に続く助詞・助動詞のアクセント

まず、名詞類に続く助詞・助動詞のアクセントがどのようなものか、(5)のデータから検討してみよう。(5a)は無核名詞に続く場合であり、先行する助詞・助動詞のアクセントは生かされるが、後続の助詞・助動詞のアクセントは抑えられる。(5b)は有核名詞に続

くため、助詞・助動詞のアクセントはいずれも抑えられる。

(5)	(a)	(b)
	ニワトリ.ニ.ハ	ノコギリ.ニ.ハ
	ニワトリ.ト.モ	ノコギリ.ト.モ
	ニワトリ.カ.モ	ノコギリ.カ.モ
	ニワトリ.シカ	ノコギリ.シカ
	ニワトリ.カラ.ハ	ノコギリ.カラ.ハ
	ニワトリ.ヨリ.ハ	ノコギリ.ヨリ.ハ
	ニワトリ.ナド.モ	ノコギリ.ナド.モ
	ニワトリ.コソ.ハ	ノコギリ.コソ.ハ
	ニワトリ.カシラ	ノコギリ.カシラ
	ニワトリ.ナンテ	ノコギリ.ナンテ
	ニワトリ.カナ.ト (言った)	ノコギリ.カナ.ト (言った)
	ニワトリ.ダ.ヨ	ノコギリ.ダ.ヨ
	ニワトリ.デス.ヨ	ノコギリ.デス.ヨ
	ニワトリ.ミタイ.ダ	ノコギリ.ミタイ.ダ
	ニワトリ.ダロー.カ	ノコギリ.ダロー.カ

すなわち、/ノコギリ.ミタイ.ダ/→/ノコギリ.ミタイ.ダ/→
[ノコギリミタイダ]のように、基底表示では、それぞれの助詞・
助動詞が固有のアクセントを持っていると考えられる。なお、「シ
カ」は無核の名詞にも低く続くため、/シカ/のようにアクセント
核が辞のはじめにあると考えればよい (/ニワトリ.シカ/→[ニ

ワトリシカ]、/ノコギリ.シカ/→/ノコギリ.シカ/→[ノコギリ
シカ])。

次に、(6)では、先行する名詞が有核・無核にかかわらず、接続す
る助詞・助動詞のアクセント核が生かされる場合である。これはち
ょうど、自立語に辞が複合語の後部要素的に付いた場合のアクセ
ントの現われ方と同じであり、⁽⁷⁾語構成の上から、「複合語境界要素」
([=])を持っているものと考えたい。

(6)	(a)	(b)
	ニワトリ=ダケ.ガ	ノコギリ=ダケ.ガ
	ニワトリ=グライ.ガ	ノコギリ=グライ.ガ
	ニワトリ=ドコロ.カ	ノコギリ=ドコロ.カ
	ニワトリ=ラシイ	ノコギリ=ラシイ
	ニワトリ=クサイ	ノコギリ=クサイ

/=グライ/ /=ドコロ/ のように接辞の頭子音が連濁を起こ
していることも、全体を複合語的に分析すべきであることを示唆し
ていると思われる。また、/=ラシイ/ /=クサイ/ の付いた形
は、副詞形になると /ニワトリ=ラシク/ /ニワトリ=クサク/
のようにアクセント核の移動が見られるところから、全体として複
合形容詞を形成していると考えられるべきであろう。⁽⁸⁾

さて、1モーラの助詞・助動詞の固有のアクセントを明らかにす
るのは容易ではないが、(5)の例で見たように1モーラ助詞の後に他
の助詞が続く場合には、先行する助詞のアクセントが現われること

がわかった。すなわち、/ニ7.ハ/ /ニ7.モ/ /デ7.ハ/ /デ7.モ/ /デ7.サエ/ /ト7.ハ/ /ト7.モ/ /カラ7.ハ/ /カラ7.モ/ /マ7.デ.ハ/ /マ7.デ.モ/ /サ7.エ.モ/ のような例から、一般に無核であると考えられている1モーラ助詞 /ニ7/ /デ7/ /ト7/ などや2モーラ助詞 /カラ7/ など、 /マ7.デ/ /サ7.エ/ と同じように固有のアクセント核を持っていると解釈するわけである。ところが、格助詞「ガ」「ヲ」や副助詞「ハ」「モ」は、通常、他の助詞が続かないため、固有のアクセント核を持っているかどうか明らかにすることが困難のように思われる。したがって、このような助詞も、無核の助詞とし扱うのが通説となっている。しかし、詳しくデータを検討してみると、/ニ7/ /デ7/ /ト7/ /カラ7/ などばかりでなく、/ガ7/ /ヲ7/ /ハ7/ /モ7/ もそれぞれ固有のアクセント核を持っていると考えざるを得ない。(7)の例は、これらの助詞のついた形に、さらに「～デ7.カ」「～ト (言った)」などを付け加えた形である。

(7)	(a)	(b)
	ニワトリ.ガ7.デス.カ	ノコギリ7.ガ.デス.カ
	ニワトリ.ヲ7.デス.カ	ノコギリ7.ヲ.デス.カ
	ニワトリ.ハ7.デス ネ7ー	ノコギリ7.ハ.デス ネ7ー
	ニワトリ.モ7.デス	ノコギリ7.モ.デス
	ニワトリ.ガ7.ト イック	ノコギリ7.ガ.ト イック
	ニワトリ.カラ7.デス.カ	ノコギリ7.カラ.デス.カ
	ニワトリ.マ7.デ.デス.カ	ノコギリ7.マ.デ.デス.カ

(7a) では、助詞のアクセント核が最初のものであるため具現化されるが、(7b) では有核の名詞に続くため抑えられてしまうのである。なお、比較のためにこのような助詞のない形を(8)に掲げる。(8a) では無核名詞に続くため /デ7.ス/ のアクセントは生きるが、(8b) ではもちろん抑えられてしまう。

(8)	(a)	(b)
	ニワトリ.デ7.ス.カ	ノコギリ7.デ.ス.カ
	ニワトリ.デ7.ス ネ7ー	ノコギリ7.デ.ス ネ7ー
	ニワトリ.ト7.モ イック	ノコギリ7.ト.モ イック

(7a) と (8a) を比較することによって、問題の助詞が、実は無核ではなく、有核であることは明らかであろう。また、(7a) と (7b) を比較することによって、これらの助詞のアクセント核が、有核の自立語の後では予想通り(2)の一般原則に従って消えることも明らかとなるであろう。アクセントの分析においては、この節の初めに述べたように、横のシンタグマティックな関係と縦のパラディグマティックな関係に注目すべきゆえんである。

なお、[ニワトリガキタ] [ニワトリカラタベタ] のような文において、なぜ /ガ7/ や /カラ7/ のアクセント核が、動詞 /キ7タ/ /タ7ベタ/ のアクセント核を消去しないのか、すなわち、なぜ [*ニワトリガキタ] [*ニワトリカラタベタ] のようにならないのかについて付言したい。これらの文は、[[ニワトリ.ガ7] [キ7.タ]] [[ニワトリ.カラ7] [タ7.ベ.タ]] のように構造的にはそれぞれ2文節か

ら成り、/ニワトリ.ガ/ /ニワトリ.カラ/ のような文節末のアクセント核は、音声表示のレベルでは下がり目として実現されないからである。換言すれば、動詞句/キヲ.タ/ /タヲ.タ/は先行する名詞句に付属しているのではなく、独立した文節として働いているからである。その点、(7)や(8)で見た/テヲ.カ/や/テヲ.セー/は単独では起らず、先行する名詞句に付属するものと言うことができる。

3.2 動詞語幹に続く助詞・助動詞のアクセント

東京方言では、名詞の場合と違って動詞・形容詞などの語幹に因しては2種類のアクセントの型しかない。すなわち、有核であるか無核であるかのどちらかであり、語彙目録において、有核語幹には[+ア]、無核語幹には[-ア]という情報を与えておけばよい。動詞・形容詞のいわゆる活用形のアクセントは、語幹アクセント核付加規則、⁽⁹⁾アクセント核引き寄せ規則などによって、あるいは、それぞれの助詞・助動詞の持つ固有のアクセント情報によって、予測することができると考えられる。以下、一段動詞「晴レル」と「腫レル」をそれぞれ有核・無核の動詞の代表例にとって、動詞に続く辞のアクセントについて考察を進めたい。

有核の動詞「晴レル」および無核の動詞「腫レル」は、語彙目録の中にそれぞれ /hare-/ ([+ア]) /hare-/ ([-ア]) のように記されているものと考えらる。有核の「晴レル」は、語幹アクセント付加規則によって /ha⁷re-/ となるが、無核の「腫レル」にはアクセント核は付加されず、/hare-/ のままである。この二つの語幹に種々の接辞が付いた形を掲げると (9)~(11) のようになる。

- (9) (a) 「語幹」/ha⁷re-/ (晴れ) /hare-/ (腫れ)
 「た」/ha⁷re-ta⁷/ (晴れた) /hare-ta⁷/ (腫れた)
 「たり」/ha⁷re-ta⁷ri/ (晴れたり) /hare-ta⁷ri/ (腫れたり)
 「て」/ha⁷re-te⁷/ (晴れて) /hare-te⁷/ (腫れて)
- (10) (a) 「る」/hare⁷ru/ (晴れる) /hare-ru/ (腫れる)
 「れば」/hare⁷re⁷ba/ (晴れば) /hare-re⁷ba/ (腫れば)
 「ながら」/hare-na⁷gara/ (晴れながら) /hare-nagara/ (腫れながら)
 「ない」/hare⁷nai/ (晴れない) /hare-nai/ (腫れない)
 「たい」/hare-ta⁷li/ (晴れたい) /hare-tai/ (腫れたい)
 「させ」/hare-sase⁷ru/ (晴れさせる) /hare-sase-ru/ (腫れさせる)
- (11) (a) 「ます」/ha⁷re-ma⁷s-u/ (晴れます) /hare-ma⁷s-u/ (腫れます)
 「よう」/ha⁷re-yo⁷o/ (晴れよう) /hare-yo⁷o/ (腫れよう)

(9)では、語幹が有核であればそのアクセントが生かされ、無核であれば接辞のアクセント /ta⁷/ /ta⁷ri/ /te⁷/ が生かされる。(10)の接辞は[+ア核引き寄せ]の素性を持っており、語幹に付加されたアクセント核が後方に引き寄せられるが、無核の語幹の場合には引

き寄せられるアクセント核がないため、全体が無核のままである。
 (11)の接辞「マス」「ヨウ」は /maʔs-u/ /yoʔo/ のように固有のアクセント核を持つと同時に [+右ア優位] の素性を持ち、語幹のアクセント核が抑えられ、接辞のアクセント核が全体のアクセント核となる。このように、動詞に続く接辞に関しては、(9)のように語幹のアクセント核があればそれを生かすもの、(10)のように語幹のアクセント核を引き寄せるもの、(11)のように語幹のアクセント核を抑えるもの、の3つのタイプがあると考えられる。

次に、動詞の終止形・連体形に続く場合の辞のアクセントについて考察してみよう。「晴レル」および「腫レル」に種々の助詞・助動詞が付く場合である。

(12)	(a)	(b)
「ようだ」	/hareʔ-ru-yoʔoda/ (晴れるようだ)	/hare-ru-yoʔoda/ (腫れるようだ)
「だろう」	/hareʔ-ru-daroʔo/ (晴れるだろう)	/hare-ru-daroʔo/ (腫れるだろう)
「まい」	/hareʔ-ru-maʔi/ (晴れるまい)	/hare-ru-maʔi/ (腫れるまい)
「と」	/hareʔ-ru-toʔ/ (晴れると)	/hare-ru-toʔ/ (腫れると)
「まで」	/hareʔ-ru-maʔde/ (晴れるまで)	/hare-ru-maʔde/ (腫れるまで)
「ね」	/hareʔ-ru-neʔ/ (晴れるね)	/hare-ru-neʔ/ (腫れるね)
「か」	/hareʔ-ru-kaʔ/ (晴れるか)	/hare-ru-kaʔ/ (腫れるか)
「らしい」	/hareʔ-ru-rasiʔi/ (晴れるらしい)	/hare-ru-rasiʔi/ (腫れるらしい)

(12)に掲げた接辞のうち、「マイ」と「ラシイ」はさきの「マス」「ヨウ」と同じように、[+右ア優位]の素性を持ち、有核の語幹のアクセントを抑えてしまう。その他の接辞は、語幹のアクセント核があればそれを生かし、無核であれば辞のアクセントが生きているのである。

なお、さきに(9)において、助辞「タ」「テ」は /taʔ/ /teʔ/ のように固有のアクセント核を持っているように分析した。これは、(13)の例に見られるように、無核の動詞に /taʔ/ や /teʔ/ が付いた場合、さらに別の付属語が付くと /taʔ/ や /teʔ/ のアクセント核が生かされるためである。

(13)	/hare-taʔ-daroʔo/	(腫れただろう)
	/hare-taʔ-kamo/	(腫れたかも)
	/hare-taʔ-wa-ne/	(腫れたわね)
	/hare-teʔ-wa i-na-i/	(腫れてはいない)
	/hare-teʔ-mo yoʔ-i/	(腫れてもよい)

なお、「腫レタ」(/hare-taʔ/) が連体修飾節として名詞の前に来る場合は、このアクセント核は実現されない。すなわち、「腫レタ手ガ」は [hare-ta te-ga] となって [*hareta te-ga] のように名詞のアクセントを低く抑えはしない。これも、統語的には、[[[hare-taʔ] [teʔ]]. ga] のような構造を持っており、修飾部の文節末のアクセント核が、音声表示レベルで、ピッチの下降として実現されないからである。

4. おわりに

これまで、辞のアクセントについての研究はあまり行われてこなかったが、生成音韻論の立場から、アクセント解釈に関する考え方、名詞や動詞に続く種々の付属語のアクセントの解釈の仕方、種々の付属語の持つ固有のアクセント核の問題などについて論じた。従来、無核の助詞や助動詞と考えられていたものも、基底表示のレベルでは有核と解釈すべきであることを指摘した。

注

- (1) 徳川宗賢編『アクセント』(『新編日本語研究2』)有精堂、1980年2月。「解説」(徳川宗賢)、299頁参照。
- (2) たとえば、和田実「辞のアクセント」(『国語研究』29号、1969年12月)、和田実「アクセント イントネーション プロミネンス」(『国語シリーズ別冊3 日本語と日本語教育—発音・表現編—』文化庁・国立国語研究所、1975年3月)など。これら2論文は若干辞句修正を加えて徳川宗賢、前掲書(注1)に再録されている。
- (3) 発音・アクセントの専門の辞典(『明解日本語アクセント辞典』三省堂、1958年、『日本語発音アクセント辞典』日本放送協会編、1966年)などは、ウサキ[◦]、ニワトリ、カカ[◦]ミ、ノキギ[◦]リのように表記されているが、これは、実線の部分は高く、実線のない部分は低く発音されることを示すと同時に、実線の最後の部分が「[◦]」になっている場合はその次の音のピッチが下がり、終わりの部分が「[◦]」で終わっている語はいわゆる平板型のもの

で、次に来る助詞も下がらないことを示している。辞書の持つ教育的配慮から、音韻の要素に加えて、音声的要素も加味した表記法がとられているわけである。

- (4) “Accent Reduction Rule”と呼ぶこともできるが、“Principle of Left-most Accent Dominancy”と呼びたい。これによって、連文節にみられるいわゆる準アクセントの現象も説明できるが、ここでは基底アクセント表示における後続アクセント核の消去を説明するためのものである。拙著、*Accental Systems in the Japanese Dialects—A Generative Approach* (文化評論出版、1975年) 8頁参照。
- (5) 同上書、10~16頁参照。
- (6) 厳密には、助動詞「デス」は /des-u/ のように分析される。語幹 /des-/ は [+助詞性] という特徴を持つため、[+有核] というアクセント表示を指定すれば、アクセント付加規則によって、/deʔs-/ のようにアクセント核が自動的に導入される。詳しくは、J. D. McCawley, *The Phonological Component of a Grammar of Japanese* (The Hague: Mouton, 1968年)、145頁参照。
- (7) 複合名詞におけるアクセント付加の問題については、拙著(注4)、第5章(161~235頁)を参照されたい。
- (8) 一般の有核形容詞においても、/タカ[◦]イ/ ~ /タ[◦]ク/ のように終止形と副詞形との間にアクセント核の移動が見られることに注目されたい。
- (9) McCawley, 前掲書(注6)、145頁参照。

(本学教育学部助教授)